


## 2012 Japan National Team Report ” Coach ”



報告者氏名	花田卓教
大会名	IODA Asian Championship 2012
開催地	Trincomalee, Sri Lanka
大会期間	2012年6月2日-10日

- 帰国後1ヶ月以内に、JODA 海外派遣担当 田中( [mame-t@silverzaq.jp](mailto:mame-t@silverzaq.jp) )までメールにて送付して下さい
- JODA 理事会にて確認の後、ホームページに公開します
- 記入時の注意点
  1. このレポートは今後海外派遣レースに参加する選手、役員また日本のジュニアのための資料です
  2. なるべく客観的な立場から、詳細に記入して下さい
  3. 大会本部や運営、他国や他国選手また特定の個人を批判するような記述はしないで下さい
- 写真資料について
  1. このレポートを補足する資料として必要です( 文中に貼り付けて下さい )
  2. 他国OP艇を接近して撮影する際には、必ず相手国の選手、コーチの了解をとって下さい


チャーター艇 メーカー	Fareast	マスト、ブーム スプリット	Optiparts Black Gold	ダガーボード ラダー、ティラー	Fareast Championship Foils
----------------	---------	------------------	-------------------------	--------------------	-------------------------------

気象について	6月のスリランカは、南西陪防雨季となり東海岸に面するトリンコモリーでは、晴天が続いていた。気温は日中30度を超え、最低気温も25度前後であった。
海面(湖面)の特徴や風の傾向	大会期間中は、北西の風が卓越し、風速も20kt前後で非常に安定していた。レース海面では北西の風が陸からの風となるため、風向の振れは大きかった。波高は、1マーク付近では50cmほど、3マーク付近では1m近くあった。 

帆走指示書内容で特記事項	競技規則61.1(a)(2)が適用となり、艇が抗議する際の赤色旗の掲揚は不要となった。
コーチボートについて	<p>FAREAST の RIB480 が提供された。エンジンは YAMAHA の 2 サイクル 40 馬力。波のある海面では、海水をかぶる。</p> <p>基本的には、2カ国で1艇のコーチボートをシェアするが、参加選手の少ない国では、3カ国で1艇のシェアもあった。</p> 

以下、日本チームより上位の選手、国について記入して下さい

選手の特徴、体格	 <p>成績上位を占めたシンガポールやタイの選手たちと比較して目立った体格差は見られなかった。 写真は、日本とシンガポールの選手たち</p>
艦装品について	選手は全員チャーター艇を使用し、個人の艦装品は、セール、メインシート、パドルのみ、ただ FAREAST のメインブロックが使いつらいため、日本選手は持参して使用。セールは、JSAIL と NORTH SAIL が半々ぐらいで使用されていた。
セッティング等	連日 20kt オーバーでのレースだったが、上位を走る選手は、パワーダウンをせず艇を走らせていた。
海上での練習方法	大会前の事前練習では、日本チームは、チーム内でのすべり、ハンドリングなどとあわせて、ニュージーランド、オーストラリアと合同でコース練習を行った。今大会で優秀な成績だったシンガポールは、プラクティスレースに参加せず、独自で練習をしていたのが印象的だった。
セーリング技術	シンガポールやタイの選手は、スタートラインでの位置取りが非常に安定していた。
戦術、戦略など	チームレースを見ていると上位のチームの選手達は、自分のポジションとそこでやるべきことを理解しているように思える。
日本選手が劣っていること	今大会は、連日 30 度をこす気温、20kt の風でレースが行われた。上位の選手との違いは、気候への適応と基礎体力に差があると感じた。

<p>日本選手が勝っていること</p>	<p>英語は上手ではないものの積極的に海外の選手とコミュニケーションをとっていた。</p> 
<p>日本チームとしての課題</p>	<p>厳しいコンディションが続く中でレースを続けるための食事や休養などの体調管理と基礎体力の向上、テクニカル的には、ボートスピードの追求と安定したボートハンドリングの習得。特に軽量の選手で上位に来る選手がいることを鑑みると強風時でも艇を安定して走らせる経験が不足しているように感じた。</p>
<p>JODA への要望</p>	<p>チームレースでの入賞を目指すことも然ることながら、ルールや戦術に精通し、確実なボートハンドリングを修得するためチームレースの普及と強化が今後の一つの重要な課題と思う。</p>
<p>その他</p>	<p>日本チーム7名の選手の今後のさらなる活躍を願う。</p>

ご協力ありがとうございました

JODA 海外派遣委員会